

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 18 日現在

機関番号：33915

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2016

課題番号：15K21357

研究課題名(和文) 戦前期中・上層女子の「音楽のたしなみ」の文化資本効果をめぐる実証研究

研究課題名(英文) An Empirical Study on the Cultural Capital Effects of the Upper Middle Class Girls' Music Skills in Pre-War Japan

研究代表者

歌川 光一 (Utawawa, Koichi)

名古屋女子大学・文学部・講師

研究者番号：50708998

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：戦前期日本における中・上層女子の稽古事文化は、近世以来の慣習や顕示的余暇として解釈されがちだが、本研究では近代化に伴って登場したジェンダー規範(家庭婦人、職業婦人、少女、令嬢等)とたしなむ対象のイメージの関連性に着目し、音楽を事例に、近代日本における女子のたしなみ像の変容を明らかにした。具体的には、“Taste”の意味でその涵養が求められていた「趣味」に、余技としての“Hobby”が加わっていき、Hobbyの量的確保が女子の修養として捉えられていく過程を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study considers the features and the meaning of the upper middle class girls' music skills and their cultural capital effects in pre-war Japan from the second half of 19th century to the first half of 20th century using the analysis concept "Tashinami". The analysis of girls' school culture, manner books and women's magazine in modern Japan made clear that the concept "Tashinami" was re-constituted as a well-educated woman's model with the expansion of girls' schools during the period. This study provides the foundation of the further educational research on acceptance and construction of the concept of "hobby".

研究分野：教育文化史

キーワード：たしなみ 音楽 文化資本 女子教育 高等女学校

1. 研究開始当初の背景

本研究の目的は、戦前期中・上層女子の「音楽のたしなみ」の文化資本効果を実証的に明らかにすることにある。

日本においては、戦前期から、中・上層女子の稽古事文化が盛んであったことが知られている。

近年の女子教育史研究においては、戦前期中・上層女子にとって、一見、近代以前から続いている慣習や顕示的余暇でしかないような、茶道、華道、ピアノなどの稽古事が、そのキャリア形成に重要な役割を果たしていた、と推測している。例えば、戦前期の女子が抱いた成功観に関して、今田絵里香は、少女雑誌の分析から、「立身出世」を目的に生きる男子に対して、女子が唯一成功の手段と捉えたのが近代西洋芸術のプロになる道であり、これを「芸術主義」と名づけている。今田によれば、近代西洋芸術のプロになるには、多くの文化資本が必要であったため、たとえそれに憧れを抱いても結果として大半の女子は、そのような成功を収めることはできなかった。したがって、「芸術主義」は女子に憧れを抱かせながら、それに失敗しても、「努力」や「才能」の無さとして納得してクーリングアウトさせ、結果として家庭に収める巧妙な社会的装置として機能した(今田絵里香『少女の社会史』勁草書房、2007年)。今田が指摘するような、女子にとっての擬似立身出世主義としての「芸術主義」の発見は、戦前期中・上層女子特有のキャリア観を示唆した点において、意義深いものである。

しかし、一方で稲垣恭子は、戦前期の女学生文化が、「モダンな教養文化」(近代的学問や教養、西洋音楽や芸術など)、「たしなみ文化」(伝統的な和漢の教養や、茶道、華道、箏、三味線等の遊芸など)、「大衆モダン文化」(雑誌、映画、ラジオ等を媒介とするファッション、髪型、持ち物などの流行や「女学生ことば」などのサブカルチャー)のいずれにも接触しつつ、特化されない、捉え難いものであった、と指摘する(稲垣恭子『女学校と女学生 教養・たしなみ・モダン文化』中公新書、2007年)。また、戦前期の女子の稽古事は「近代西洋芸術」に限られず、茶道、生花、箏、長唄といった遊芸にまで及んでいた。さらに、今田の分析も少女雑誌上の表象分析に留まっている。

戦前期中・上層女子のキャリア形成に対する「芸術主義」の文化資本効果を検証する際には、遊芸を含む「伝統芸術」も視野に入れること、メディア上の表象に限らない実証的分析を行うこと、の2点が重要になると考えられる。

2. 研究の目的

(1) 研究の視点

本研究では、戦前期中・上層女子のキャリア形成における「芸術主義」を検証するために、女性の「音楽のたしなみ」に着目する。

「たしなみ」は、今日においても、「身だしなみ」「酒のたしなみ」など、用例は多様であるが、大西昇によれば、それは、「単なる享受でも、芸術の創作や鑑賞でもなく、倫理の概念で蔽ひ畫されず、又、美容術とも教養とも学問とも異なつてゐて、しかも此等のすべてに關聯性を有する」(大西昇「たしなみの伝統と構造」大江精志郎編『世界観の哲学』理想社、1943年)のものである。読書を中心とした学問や教養に比べ、「『たしなみ』においては、『稽古』や『こころがけ』によって、知識の習得だけでなく身体を通してそれらが身につけられていく過程が重視される」(稲垣恭子「武家娘と近代「女のいくさ」と言説空間」『教育・社会・文化』第12号、2009年)。

「稽古事」「習い事」という概念を採用する時、学校外で「いつ、誰に、どのように習ったか」という、習得過程が問題となるが、「たしなみ」という概念を採用する時、学校内外を問わず、「結果として身についた素養」の発露や効果へと重点を移す事ができ、本研究が目的としている、戦前期中・上層女子のキャリア形成に対する芸術的素養の文化資本効果の解明に適している。

(2) 研究の対象

本研究では、「芸術のたしなみ」の中でも「音楽のたしなみ」に着目する。その理由は、「邦楽/洋楽」という芸術の「伝統/近代」別の考察が行うことができる、実態として、戦前期の芸術的たしなみの中でも、大規模に行われていたと考えられる、楽器がモノとして存在しているため、他の芸術的たしなみよりも、「音楽をたしなむ女子」を視覚的に把握することができる、ためである。

戦前期中・上層女子の「音楽のたしなみ」に関する研究は、音楽学研究においてもいっから蓄積されつつある。それらは、()「家庭」における音楽の役割に関する研究(細川周平「家庭音楽 団樂にピアノが聞こえ」同研究代表『近代日本における西洋音楽文化の衝撃と大衆音楽の形成 黒船から終戦まで』平成11-14年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))2003年、周東美材「鳴り響く家庭空間 1910-20年代日本における家庭音楽の言説」『年報社会学論集』第21号、2008年など)、()「少女」像と親和的な音楽に関する研究(坂本麻実子「音楽メディアとしての近代日本の少女雑誌とその歌曲」『人間文化研究年報』16、1993年、玉川裕子『ピアノを弾く女性』というジェンダー表象 近代日本の場合』『ジェンダーと表現』2007年度フェリス女学院大学学内共同研究報告書、2008年など)、()「令嬢」像と親和的な音楽に関する研究(周東美材「書物のなかの令嬢 『趣味大観』にみる昭和初期東京の音楽」『研究紀要』第35号、2011年、津上智実「婦人グラフ雑誌『淑女画報』(1912~1923)に見るピアニスト小倉末子と閨秀音楽家た

ち」『神戸女学院大学論集』第 59 巻第 1 号、2012 年など）、（ ）「職業婦人」としての女性音楽家や遊芸師匠に関する研究（玉川裕子「音楽取調掛および東京音楽学校（明治期）教員のジェンダー構成」『桐朋学園大学研究紀要』38、2012 年、矢島ふみか『箏三味線音楽と近代化』日本女子大学博士学位論文、2007 年など）などに分けることができるが、いずれも、考察する資料や対象とする時代が断片的である。

本研究は、戦前期の中・上層女子の「音楽のたしなみ」の文化資本効果について、実証的に明らかにするために、（ ）戦前期の各種調査から、中・上層女子の「音楽のたしなみ」をめぐる量的概況を把握した上で、（ ）校友会雑誌・同窓会雑誌等の学校関連資料、礼儀作法書等の分析から「たしなみ」の発露の様子を把握し、（ ）人名録や自伝を用いて、ピアノやヴァイオリンなどの女性音楽家や箏、三味線といった女性遊芸師匠のキャリア形成を整理する。

3. 研究の方法

(1) 資料と手順

史料調査・整理

旧制高等女学校の学校沿革史、校友会雑誌・同窓会雑誌、礼儀作法書等を、複数回の史料調査を通して収集、整理する。

音楽史、教育史、女性史研究の分析手法のブラッシュアップ、先行研究の整理

本研究の手法、テーマに関連する先行研究を収集する。その上で、内容を精査して効率的・効果的な研究の進展の基礎固めをする。

実証的な検証

申請者がこれまでに研鑽した教育史学の実証的な検証方法を存分に活用し、教育史、音楽史、女性史といった多方面の学会で口頭発表、論文投稿を行う。

(2) 分析の視角

片岡栄美は、日本の芸術文化実践のジェンダー差という客観的構造は、「文化定義のジェンダー化」（人々の頭のなかにある、ある文化が女らしいか男らしいかという知覚認識図式）「ジェンダー・ハビトゥスの身体化とジェンダー資本の蓄積」（ある「女性（男性）らしい文化」を身に付けることで、女性（男性）らしさが増し、社会的に有利になる）「ジェンダー化した文化実践」（ある文化は主に女性（男性）が享受するという実態）の 3 つの側面に支えられており、それらが相互に関連し合っていると述べる（片岡栄美「芸術文化消費と象徴資本の社会学」ブルデュエ理論からみた日本文化の構造と特徴」『文化経済学』6(1)、2008 年）。本研究では、音楽のたしなみの実態（習得の実態）を概観した上で、19 世紀末から 20 世紀初頭において、音楽のたしなみの定義がどのようにジェンダー化されていったかという表象を

分析する（ ）。そして、その身体化と資本としての蓄積（ ）文化実践（ ）について可能な限り検討していく。

4. 研究成果

(1) 女子の音楽のたしなみ像の近代化の過程 東京の音楽文化を中心に

東京において、女子の箏や三味線のたしなみは近世以来の「娘の慣習」であり、良妻賢母論が唱えられ始めた 1890 年代から 1900 年代には「嫁入り前の手すさび」程度として認識されていた。この間、女学校制度の発達や東京音楽学校の存在により、女子はピアノを始めとする洋楽をたしなむことが可能になり始め、欧米にならう形で、家庭における女性のピアノの披露が理想化された。この家庭音楽論の進展の中で、箏や三味線のたしなみも、「趣味 (Taste)」として容認されるようになる。「家庭」で求められる「趣味」としては、基本的にはピアノのような西洋的な趣味が望ましいとされつつも、実用性や中間文化の創出の観点から、箏や三味線といった伝統的教養も包摂されることとなったのである。近代日本において女子は、近い将来「良妻賢母」になることが社会的に期待されていたにもかかわらず、料理や裁縫に勤しむ以外には良妻賢母になる具体的手段が示されず、結婚準備の意味が曖昧にならざるを得なかったが、その空白に多様な「趣味」が盛り込んだことが推測できる。「家庭」導入・普及に伴う「一家団欒」の重視により、「良妻賢母」が「趣味」を持つことへの公的な意味を与えられたと同時に、家庭婦人を目指す（ことになっている）女子の「趣味」習得にもキャリア形成上の意味が与えられたのである。

次に、女子としてのジェンダー規範の観点から音楽のたしなみ像について検討した結果、「少女」は今田（2007）の知見とも合致する形で、近代西洋芸術であるピアノへの憧れを読み取ることができ、家庭音楽を実践する西洋風の少女像や女性音楽家としての職業的成功も雑誌中で温存されていった。異性性から遠ざけられていた「少女」にとって、どのように結婚するかや、（そもそもなぜ「良妻賢母」と「職業婦人」が相いれないのかも含め）妻・母としてどのように振る舞うべきかよりも、西洋の表象を身にまとうことが重視されていた。

一方で、結婚を意識すべきジェンダー規範である「家の娘」としては、「少女」と同じく、娘として一家団欒に寄与するために趣味を持つことが促される一方で、一つの趣味に熱中する（Taste を深める結果、Hobby の一つとなる）ことで、将来嫁することとなる「家」との不仲を招いたり、結婚相手の選択肢を狭める点が懸念されていた。無論、熱中の結果、趣味が職業につながることも良妻賢母像から外れると考えられた。この結果、「家の娘」には Hobby の量的確保が求められ、趣味が和洋折衷化、修養化することとなった。

「良妻賢母」「少女」というジェンダー規範としては、西洋風の「家庭」像を理想としつつ、現実との調整のために「家の娘」というジェンダー規範も発達していったとも言えるだろう。

このように「家庭」導入・普及によって、習得としてのたしなみが基本的には西洋化を果たしていった一方で、披露を通じた交際・社交像は西洋化を果たさなかった。「家庭音楽」論は、家庭婦人が音楽を習得する理由を与えたが、実際に妻や娘が家庭の一家団欒を実現するために食後に演奏したり、ホームパーティーや来客時にたしなみの成果を披露すべきという議論は、今回検討した時期の日本において、十分展開され得なかった。女子にとって、「趣味」は、さほど披露を期待されずに、専ら習得に励む対象としてのイメージが定着していったことが予想される。

19世紀末から20世紀初頭におけるたしなみと当時台頭し始めた多様なジェンダー規範との関係性に着目すると、武家奉公のような地域の風習や個々の家の教育方針の下、一稽古事として行われていたたしなみが、国民国家の基礎単位となる「家庭」形成に必要な家庭婦人の素養としての「趣味」として位置づけ直され、同時に未婚期の「趣味」の修養にも公的な意味が付与されたこと、たしなみの西洋化の過程で、家の娘としての女子にとって「趣味」が、量的に確保すべきHobbyと捉えられ、和洋折衷化と修養化を果たしたという構造、この背景で、女子については、たしなみを通じた家族・友人との交際・社交像の西洋化が果たされなかったため、披露より習得を重視するたしなみ像が普及した可能性を指摘することができる。

(2) 今後の課題

本研究を通じて、19世紀末～20世紀初頭の日本における女子の音楽のたしなみをめぐる「文化定義のジェンダー化」過程を明らかにすることができたが、それとジェンダー・ハビトゥスの身体化やジェンダー資本の蓄積、ジェンダー化した文化実践の関連性を十分明らかにすることができなかつた。このために、人名録や自伝を用いて、ピアノやヴァイオリンなどの女性音楽家や箏、三味線といった女性遊芸師匠のキャリア形成を整理する作業を継続する必要がある。

これらの課題を踏まえ、今後、分析概念、史料、分析方法の再検討とともに、包括的に文化資本効果を明らかにしていきたい。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計15件)

歌川光一(2015)「二〇世紀初頭日本における『女子にふさわしい楽器』のイメージ 女性雑誌付録絵双六を中心に」『東洋音楽研究』第80号、pp.41-59、査読有り。

歌川光一(2016)「一九〇〇～一九三〇年代日本の女性向け職業案内における箏・三味線師匠の職業イメージ」『東洋音楽研究』第81号、pp.49-61、査読有り。

歌川光一(2016)「近代日本における中上流階級女子のたしなみ像 19世紀末から20世紀初頭東京の音楽文化に着目して」東京大学大学院教育学研究科博士論文、査読有り。

歌川光一(2017)「『学び』重視の背景にある(教育)哲学 学習科学の発展との関係」名古屋女子大学文学部児童教育学科編『教育・保育モノグラフ』No.1、pp.7-12、査読なし。

歌川光一(2017)「近世教育史における御殿奉公の再定位に向けて」名古屋女子大学文学部児童教育学科編『教育・保育モノグラフ』No.1、pp.231-239、査読なし。

歌川光一・水引貴子(2017)「東京都公立小中学校における『日本の伝統・文化理解』教育にみるクロスカリキュラムおよび接続カリキュラムの可能性と展開例 自治体によるカリキュラム開発に関する一考察」『名古屋女子大学紀要』第63号、pp.157-168、査読なし。

歌川光一(2015)「メディアと音楽 1 礼法・マナー本の中の音楽」『音楽文化の創造』第73号、pp.26-27、査読なし。

歌川光一(2015)「社会教育・生涯学習実践として『趣味』をみる視点 その歴史と展望」『社会教育』831、pp.20-25、査読なし。

八木正一・歌川光一(2015)「音楽の街 マロニエ 地域の音楽活動(FORUM in 国際音楽の日宇都宮2015)」『音楽文化の創造』第74号、pp.7-12、査読なし。

歌川光一・佐々木基裕(2016)「教育文化に関する歴史及び思想問題としての近代日本の習い事 『嗜み』『師事』の社会的意味に焦点を当てて」『音楽文化の創造』第76号、pp.15-19、査読なし。

歌川光一(2016)「書評 小山静子編『男女別学の時代 戦前期中等教育のジェンダー比較』柏書房、2015年」『音楽文化の創造』第76号、pp.64、査読なし。

歌川光一(2016)「インフォーマルラーニングを促す教育実践の動向 『学校教育/学校外教育』のフラット化を背景として」『社会教育』842号、pp.14-18、査読なし。

八木正一・歌川光一(2016)「広げよう『音楽の輪』つなげよう『文化の和』(FORUM in 国際音楽の日 名古屋 2016)」『音楽文化の創造』第77号、pp.7-12、査読なし。

歌川光一(2017)「『たしなむ』環境を醸成する社会教育・生涯学習実践へ 音楽の活動事例から」『社会教育』853号、頁未定、査読なし。

歌川光一(2017)「昭和戦前期における小学校女性教員・保育者(保姆)養成の一側面 名古屋高等女学校卒業生の消息を手掛かりに」『総合科学研究』第11号、頁未定、査読なし。

[図書](計9件)

歌川光一(2015)「女性と音楽のたしなみの日本近代」玉川裕子編著『クラシック音楽と女性たち』青弓社、pp.200-230。

歌川光一(2016)「『教育制度』『教育課程』を理解するための青少年文化史」(堤ひろゆき、石黒芙美代と共著)「教育課程の再編と戦後民主主義下の青少年 学習指導要領「試案」の時代」歌川光一・野内友規編著『教職をめざす大学生のための青少年文化概論』三恵社、pp.6-43、44-56。

歌川光一(2016)「近代学校教育の誕生・普及と青少年 女子編」、「学習指導要領の変遷 学習指導要領の成立 1947年、1951年改訂」、「学習指導要領試案時代の教育と青少年」、「戦後日本における教育制度の変遷と学校教育の沿革」歌川光一・野内友規編著『教職をめざす大学生のための青少年文化概論 教育の基礎的理解に向けて』三恵社、pp.18-31、50-53、68-77、125-128。

歌川光一(2016)「子ども観をめぐる思想と歴史の基礎事項」(佐々木基裕との共著)「教育課程・保育課程の幼保小連携 接続カリキュラムの動向」『総合的な学習の時間』が提起する教育課程・教育方法の課題 カリキュラム・マネジメントと『真正の評価』論」(佐々木基裕との共著)名古屋女子大学文学部児童教育学科編『教員免許状更新講習の理解を深めるための教育・保育の論点ガイド』三恵社、pp.3-6、16-18、65-68。

歌川光一(2016)「次期学習指導要領・幼稚園教育要領改訂に向けたカリキュラム・マネジメントの理解 『社会に開かれた教育課程』を現場で感じ取るために」「教育の方法と技術 アクティブ・ラーニングの理念を知る」名古屋女子大学文学部児童教育学科編『教職・保育職シリーズ 2 教育実習で効果的に学ぶために』三恵

社、pp.7-15、116-122。

歌川光一(2016)「生涯学習社会における教育の現状と課題」(佐々木基裕と共著)「資質・能力育成のための教育の実践 課程・方法・評価」(佐々木基裕と共著)名古屋女子大学文学部児童教育学科編『教職・保育職シリーズ1 教職・保育職をめざす人のために』三恵社、pp.12-18、169-180。

歌川光一(2017)「教育思想・ポストモダン・シティズンシップ教育」名古屋女子大学文学部児童教育学科編『教職・保育職シリーズ3 あたらしい教育をめざして』三恵社、pp.1-6。

歌川光一(2017)「第3章2節 学びとは何か」「第3章3節 教師とは何か」伊藤潔志編著『哲学する教育原理』保育出版社、pp.64-68、69-73。

歌川光一(2017)「第8章 学校教育の制度」田中正浩編著『教育の質を高める教育原理』大学図書出版、pp.100-111。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

歌川 光一(UTAGAWA, Koichi)

名古屋女子大学・文学部・専任講師

(現 昭和女子大学・人間社会学部・専任講師)

研究者番号：50708998